

英語現在完了時制に関する Error Analysis

広島大学大学院

山 田 純

(1) 従来、初級レベルの文法教授については種々の研究が行なわれてきているが、中級レベルに関するものは立ち遅れていると言わざるを得ない。その対策としてまず中級レベルと見做されている学習者の現状の外国語文法能力を把握する必要があり、本研究は、学習者の犯す誤りに焦点を当てながら、その第一段階に近づいてゆこうとするものである。

一般に動詞体系は言語の中核的領域であると言われるが、経験的にも外国語として英語を学習する際、一つの難関になっていると言える。これは A. Afolayan(1971) の言を借りれば、二ヶ国語間の対応関係が複雑な場合、目的言語を学習するのが非常に困難になるということであり、日英語の動詞の対応関係もその原則に当て入っているように思われる。ここでは、動詞体系の一部を構成している時制の問題、その中で特に現在完了時制を取り上げている。現在完了を選んだ理由は、それがマスターするのに困難であると言われているからだけでなく、現在完了は意味論的には過去を示すが、形態論的には現在を示すといういわば、現在と過去に跨る特性を有しており、それを理解、習得することは英語の全時制の中の一つの要を捕えることになると思われるからである。なお四技能との関連については、対象が抽象的な文法項目である為、neutral なもの、即ち凡ての技能に渡る基本的な要素を問題にすることになるが、production の面から主な手掛りを得ている。そして主目的は日英両語の相違点と英語特有の性質を記述し、それに関連付けて現在完了時制のどの点を何故誤るかを予測し、それを実証すること、及び当該領域がどの時期に於いてどの程度習得されているかについて探ることにある。従ってその後の学習者の教授・学習方法についての具体的な十分な考察は行なっていない。

現在完了は学校文法に於いて継続、経験、結果、完了の四つに下位区分されているが、それぞれの境界線は明確に引けない場合が少なくない。特に経験、結果、完了はそれら自体、意味的に重なり合う面をもっており、便宜上それらを一まとめにして、継続と区別して論ずることにする。各々について簡単に述べると、まず継続である為の条件として〔+ stative〕動詞が用いられ、且つ time-duration を示す adverbial specification と共起すること、次に〔- stative〕動詞が用いられても、それは「習慣」又は「繰り返し」を意味し、且つ同様な adverbial specification と共起すること、更に現在完了進行形が用いられ、同様な specification と共起すること、の三通りが基本的に設定される。換言すれば、述部が広い意味での状態性を示して且つ time-duration を示す adverbial specification と共起する場合が継続を示すということになる。次に、経験、結果、完了である為の条件は〔± stative〕動詞に拘らず、time-duration を示す adverbial specification と共起しないということ、従って indefinite past を示すということである。この点に於いて、周知の如く、現在完了は definite past を示す adverbial specification と共起出来ず、過去形のもつ特性と異なってくる。更に現在完了全体に渡る基本的な特性として、present relevance という概念をもっている点が見逃せない。他方、これに日本語を照し合わせてみると、まず日英語で皮相的に対応している動詞も〔± stative〕素性は多くの場合一致していない。又、日本語では現在と過去という分類ではなく、完了と未完了であるという点も重要である。そして日本語は indefinite past を弁別的な意味特性として時制体系の中に位置付けていないし、present relevance という概念も文脈によ

て規定出来る場合もあるという程度である。以上の日英語の略述から、いくつかの問題が生まれてくることになる。

- (2) 学習者の犯す errors を分類する為の基準はいろいろ考えられ得るが、その矯正ということを考慮すると errors の原因を基準にして分類するのが適当であると思われる。Errors の原因についても様々なものが設定されているが、ここでは言語学的な要因を中心に置いている。まず、interlingual なものと intralingual なものに分けるが、これも大雑把な二分法であり、重複する場合等もあり、便宜的なものである。しかしながら、日英語の〔± stative〕動詞の相違に関わる問題は前者に、indefinite past 及び present relevance に関するものは後者に属するものとして論ずることも可能であろう。そして〔± stative〕動詞の相違から負の転移、即ち干渉が生ずるし、日本語に明示的に存在しない indefinite past と present relevance について、その習得に困難を来すというところから、誤りも多いであろうという予測がたつ。

ところで、その習得が難しいと言われている現在完了に関する同一の問題を全般的英語能力の異なる二つのグループに課すことによって、現行の教授・学習法でどの時期に於いてどの領域でどの程度、干渉の度合が少なくなるかがおよそ捕えられるのではないかということが考えられる。これが本研究の中で個々の error の分析と並んで重要な問題である。何故ならば、それが十分把握された場合、干渉の起る領域と度合に応じて、中級レベルの学習者を対象に dynamic な教授法が可成り具体的に考案され得るであろうと思われるからである。

以上の仮説に基づいて error analysis を行なった方法について述べなければならないが、ここでは中級レベルを高校レベルと考え、対象者を公立高校一年生45名(以下、高1グループと略す)と同校三年生43名(以下、高3グループと略す)の二つのグループとした。全員大学進学志望者であり、高1グループと高3グループの学習者の質に於いては(即ち、推定上の同時点に於ける全般的な英語能力については)等しいと言えるし、教授・学習法もほぼ同じであると見做すことが出来る。勿論、現時点で両グループを比較すると全般的英語能力は高3グループの方が上であると言える。次に、学習者の文法能力を引き出す方法が問題になるが、残念ながら現段階では、正確に行なうことは不可能であり、どんなテストに於いても、その妥当性・信頼性は多かれ少なかれ欠けることは否定出来ない。ここでは以下に例示する和文英訳10題(以下、テスト1と略す)と正誤問題17題(以下、テスト2と略す)の二種類の比較的分量の少ないテストを与えた。

次の下線部を英語になおせ。(テスト1)

- (1) 彼は英語がペラペラです。彼は英語を完全にマスターしています。
- (2) 僕は2時間もこの手紙を書いていますが、まだ書き終わっていません。
- (3) トムは1965年と1971年に日本を訪ずれています。
- (4) 日本は第2次大戦以来めざましい進歩を遂げました。

次の各文に関して正しくないもの、矛盾するものには×印とその理由を、正しいものには○印を書け。(テスト2)

- () He has studied English two years ago.
- () Bob has sung a song, and he is still singing.
- () The boy is waiting since yesterday.

目的は現在完了時制に限定しているので、文体的に難解な和文は与えず、多義性のない簡潔な文を用いるように努めた。なお、テスト1のうち3題は時制と相の総合的なテストを行なった太田朗(1971)の和文を借用し、やや簡単に書き改めて用いた。テスト2の用例も多くの海外の言語学者

が用いたものの中で簡単なものを借用している。そして学習者の当て推量を極力避ける為に「誤り」と判定した場合、その根拠を記述させたが、テスト2はテスト1の結果の信頼性を確かめようとしているもので、付随的に present relevance について調べることが目的であった。従って、以下ではテスト1の結果を中心に分析している。配分時間はテスト1が25分、テスト2が15分であった。

error と mistake を区別することには問題があり、ここでは綴り字の誤りについては1点とし、正解のみを2点とした。

(3) まず全体的な結果について概観する。結果は表1, 2, 3に示すとおりであった。

表1 高1グループの得点

問題	生徒	1	2	45	計	平均	分散	標準偏差
1		0	0	0	25	0.56	0.78	0.88
2		2	1	2	69	1.53	0.38	0.62
3		2	2	0	24	0.53	0.78	0.88
⋮		⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
計		12	9	11	440	9.16	11.00	3.32

表2 高3グループの得点

問題	生徒	1	2	43	計	平均	分散	標準偏差
1		0	0	0	26	0.60	0.84	0.92
2		2	2	0	43	1.00	0.65	0.81
3		0	2	0	36	0.84	0.93	0.96
⋮		⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
計		12	9	7	400	9.30	18.12	4.25

表3 高1及び高3グループの得点分布

得点	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	Σ
高1グループ (F _{1j})	2	2	0	1	4	2	10	5	3	3	5	5	1	0	2	0	0	0	45 (N1)
高3グループ (F _{2j})	1	2	4	2	3	4	5	3	2	1	9	0	2	1	0	2	1	1	43 (N2)
T _j = F _{1j} + F _{2j}	3	4	4	3	7	6	15	8	5	4	14	5	3	1	2	2	1	1	88 (N)

表1, 2について高1、高3グループの得点の分散及び平均値をそれぞれ統計的に検定すると有意水準5%で等しい ($F \div 1.65, F_{.025}(42, 44) \div 1.67, t \div 0.18, t_{.05}(.86) \div 2.00$) と言えるし、表3についても両グループの得点分布も有意水準5%で等しい ($\chi^2 = 22.43, \chi^2_{.05}(17) = 35.72$) と言える。即ち、これは両グループには有意な学力差がないということを示すものであるから、高1グループと高3グループが質的に同じであり、同一の教授法を受けているとすると、高3グループは過去2年間の英語学習に於いて少なくとも現在完了については有意な進歩がなかったということになる。更に高1グループも今後、同様な教授・学習方法では2年間進歩しないということになる。従って、このことから次のことが推察される。少なくとも現在完了に焦点を当てた場合、現行の教授・学習方法には欠陥があるのではないか。或いは妥当ではないのではないか。interlingual 及び intralingual な障害を考慮に入れて、教授・学習方法の改善を計るべきではないか。勿論、四技能との関連で考えると、問題は一層複雑になり、今後の方向について断言することは出来ないが、以下に示すテスト1については、いくつかの error analysis がその場合の一つの手掛りになると思われる。

問1は〔± stative 〕素性に関する日英語動詞の相違による干渉の為、予測通り正答率は低

かった。即ち、ここでは英語の master は〔 -stative 〕動詞であるが、日本語の「マスターしている」は〔 + stative 〕素性を具有しているという相違点が障害となっている。これに関連して、多くの学習者は、日英語を問わず、〔 -stative 〕動詞が現在形で用いられると「未来」か「現在の習慣」を表わすかの何れかであるという事実を認識していないように思われる。正答である "He has mastered English." と答えた者は、高1グループが12名、高3グループが13名、残りほとんどが "He masters English." としていた。(但し、高1グループの中で1名ほど、"He mastered English." としていたので正解としている。)次に問2と問6(「ジョンは3時からここで待っています。しかし彼はまだ来ません。」)については、他の間に比べて得点は高かったと言える。問6は問2と本質的には同じであり、日本文では問2は「書く」という動詞を用い、問6は「待つ」と「来る」を用いているという相違があるに過ぎない。しかし、問2と問6の正答率について相関関係を調べてみると必ずしも高くなかった。即ち、高1グループでは、0.23とほとんど相関関係はなく、高3グループでは、0.58とやや相関関係があるという程度であった。もう少し詳しくみると、問2と問6共に正解した者は高1グループでは9名、高3グループでは6名で、一方だけ正解した者は高1グループが21名、高3グループが11名であった。このことは、特に後者の高1.3グループ合わせた32名について言えば、動詞の種類によって、彼らの時制に関する運用力が左右されているということを示している。もしこの原因が、transfer of training によるものであるならば、教師側の適切な説明と適切な practice によって矯正は比較的容易であろうと思われる。問3については、意外であるが非常に悪い結果を示した。正解者は高1グループが12名、高3グループが19名であった。誤りの例は "He had visited Japan." のように過去完了形を用いた者が高1グループ7名、高3グループ8名であり、"He has visited Japan." のように現在完了形を用いた者が高1グループで22名、高3グループで14名であった。しかし、afterthought 的に "He has visited Japan, in 1965 and 1971." とした者が全体で5名ほどいたが、それは正答としている。ここでこの結果だけから現在完了形を用いた学習者の言語運用能力を推測すると、前述したように、日本語には完了と未完了という概念しかないで母国語干渉の要素があるとも言えるし、更に目的言語の特性、即ち、この場合現在完了のもつ indefinite past という意味特性を彼らの大多数は認識していないということになる。ところが、テスト2に於いて "He has studied English two years ago." の正否を判定させると、それを「誤り」とした者は、圧倒的に多く、高1グループは40名、高3グループは34名であった。但し、誤った判断の下にそれを「誤り」と判定した者も若干名いるが、それを差し引いても概して現在完了の indefinite past という特性は認識されていると言える。そうすると、この二つの相反する結果を統合して、多くの学習者は注意を喚起すれば、indefinite past を正しく駆使することが出来るが、特に表出する場合には見過してしまいがちであると結論することが出来る。これは production (テスト1)と perception (テスト2)に関する運用能力のギャップ、或いは「わかっているが使えない」ということを示すものであると共に、Corder(1967 (1974)) の error 対 mistake (systematic 対 non-systematic)と competence 対 performance とを関連付ける主張に反論する一つの材料を与えてくれるものであると考える。外国語話者については、linguistic competence と linguistic performance の区別が出来にくいということは既に Nickel(1973) が述べている論に賛同するが、更に一歩進んで、competence と performance という概念を外国語教育学の中に導入することを否定すべきであると考えられる。何故なら Chomsky 自身 competence に対する明確な見解を持っているように思われぬということと、或る学習者が正しく言語を運用出来ない場合、「彼はそれにも拘らず、この曖昧とした

competence を備えている」と言ってもほとんど意味がないということからである。(但し、competence が performance の中ではっきりとした位置付けがなされ得るとことが示されるならば、それらを導入することも意味を持ってくるであろう。)

以上、限られた問題について分析を試みたが、資料不足からくる不備は今後、更に詳細な調査によって補わなければならない。そうすることによって英語教育に有効な情報を提供することになる。最後に error とコミュニケーションの問題について付言すると、コミュニケーションを円滑に行なう為の必要最小限度の条件があるが、その中の一要素に学習者の犯す error の度合の問題がある。既に miscommunication を起す error とそうでない error を区別することは強調されている。上例を当て入めてみると、問3の "He has visited Japan in 1965 and 1971."などは伝達にはほとんど影響を与えないであろうし、問1や問2については miscommunication を引き起すシチュエーションは十分考えられるであろう。しかし、コミュニケーションも errors を分類する為の一つの基準にすぎず、教授・学習過程の中に適切に組み込まなければならない。コミュニケーションの重要性を強調するあまり、自然で論理的な学習過程を破壊するようなことがあってはならず、組み込む際の十分な検討が必要になってくるであろう。

- (4) 議論が四方に分散したが、まとめると次のようになろう。英語現在完了時制は日本人学習者にとって難解であって一般に中級レベルの文法は習得していると思われる高校一年乃至三年生も十分ではなかった。そして高校一年から三年について有意な進歩がなかったという点から、いわゆる四技能に組み込まれ得る中級・上級文法論を構築してゆく必要性が感じられる。それには error analysis という帰納的な方法が一つの強力な手掛りを与えてくれそうである。勿論、それだけでは十分ではなく、言語学や教育学等学際的な観点から、学習者の strategies を捕えてゆかなければならないであろう。或いは表 1. 2. 3 が示すいわゆる成功した学習者の strategies を探ろうとすることも一つの方法であろう。だが、何れの方法をとっても、問題は決して容易ではないと言わざるを得ない。即ち、本研究で取りあげたような極部的なものだけを問題にする訳にはゆかないからである。例えば高校一年と三年を比べて後者の英語力の方が全般的に優れていると言った場合、「全般的」とは具体的に何と何を指すのか、四技能の中では何か、語彙の面ではどのような語を指しているか等が問題になってくる。これらも合わせて考えなければならないであろう。しかし、本研究によって少なくとも一つの方向性は見出し得たと思う。

(主要参考文献)

1. Afolayan, A. (1971) "Contrastive Linguistics and the Teaching of English as a Second or Foreign Language" ELT, 25.
2. Corder, S. P. (1967(1974)) "The Significance of Learners' Errors" IRAL, 5. Also in Error Analysis edd. by J.C.Richards.
3. 久野 璋、(1973) 『日本文法研究』大修館。
4. Lakoff, R. (1970) "Tense and its Relation to Participants" Lg, 46.
5. McCawley, J. D. (1971) "Tense and Time Reference in English" Studies in Linguistic Semantics edd. by C. J. Fillmore and D. T. Langendoen.
6. Nickel, G. (1973) "Grundsätzliches zur Fehleranalyse und Fehlerbewertung" Fehlerkunde, Hrsg. G. Nickel.
7. 太田 朗、(1972) "Comparison of English and Japanese with Special Reference to Tense and Aspect" SEL, 1.